

小林昇とドイツ経済思想史研究

田村 信一

はじめに

小林昇の経済学史研究がリスト、ステュアート、スミスに囲まれた「重商主義」ないし「原始蓄積」期の経済思想の「豊饒なデルタ」を耕す研究であり、その出発点となったものがリスト研究であったことは周知の事実である。そのリスト研究の主たる成果は『小林昇経済学史著作集』（以下『著作集』と略記）・・・に「F・リスト研究（1）」（1978年）・「F・リスト研究（2）」（1979）・「F・リスト研究（3）」（1979）として収録されている。しかし小林のリスト研究は戦時中の「フリードリッヒ・リスト序説——生産力の国民的体系——」（『商学論集』15 1, 1943年8月）、および「フリードリッヒ・リストの生産力論序説——国民的生産力と帝国論——」（『国際経済学研究』4 8, 1943年8月）によってはじめられ、前論文が「重商主義の解釈について」（『商学論集』13 1・2合併号, 1943年8月、『著作集』に収録）とあわせて『フリードリッヒ・リスト序説』（伊藤書店1943年10月）として出版された。この戦時中の論文は「リスト『農地制度論』によろやく手を掛けただけの段階にとどまっていた」「未熟さ」のために『著作集』に収録されなかった（『著作集』「あとがき」457）。また『著作集』全9巻刊行後に続巻として出版された2冊の『著作集』のXI巻「経済学史新評論」（1989年）、『東西リスト論争』（みすず書房 1990）には『著作集』以後の論説が収められた。最後にリスト研究を回顧した「『東西リスト論争』新考」（『日本学士院紀要』61 2, 2007年）までを含めると、実に54年間に及ぶリスト研究であり、おそらくは今後超えることのできない前人未到の業績といえるであろう。

そうした意味でドイツ経済思想史を専攻する研究者にとって、巨大な山脈のようにそびえる小林リスト論は、膨大な遺産であると同時に行く手を拒む壁のような存在である。ところがこれまで小林のリスト研究は、戦後間もなく発表された代表作『フリードリッヒ・リストの生産力論』（東洋経済新報社 1948）にかかわって言及されるので常であった。主著とされる『経済学の国民的体系』（以下『国民的体系』）ではなく『農地制度論』を中心として解釈し、しかもここで主張された晩年の植民論をナチスの先駆とみなした独自のリスト論は、極めてインパクトの強いものであり、そうした受け止め方は当然でもある。しかし小林のリスト研究を『生産

力論』だけで語ることは、その前後における小林の研究の背景や研究者としてのたゆまぬ努力を軽視することになるだろう。さらにスタンダードワークとなった小林リスト論は、冷静に見ればリスト中心のドイツ歴史学派を描き、リスト以降の研究を抑制した側面も否めないのである。本稿では小林リスト論に内在してその全貌を描きつつ、それらの研究の戦前・戦時における歴史的背景にも目を向け、あらためて小林の研究が残した遺産を再考してみたい（なお本稿では個人的回想を記した注記の部分を除いて敬称を略した¹⁾）。

1 リスト研究の全体像

小林のリスト研究の全体を概観するために、まず『小林昇著作目録』（立教大学経済学研究会）によってリスト関係の著作を年代順に列挙してみよう。『小林昇著作集』に収録されたものはローマ数字の巻号を記した。

- 1 フリードリッヒ・リストの生産力論——国民的生産力と帝国論——（国際経済調査所『国際経済研究』4巻8号1943/8）
- 2 フリードリッヒ・リスト序説——生産力の国民的体系——（福島高等商業学校『商学論集』15巻1号）

1) ここで個人的回想を記すことをお許しいただきたい。私は本来の意味での小林先生の弟子ではない。私が大学院の小林ゼミに出席したのはただの1年間だけである。法政大学大学院修士課程でイギリス経済史の田中豊治先生から指導を受けていた私は、ドイツ経済史の専攻を志し、当時非常勤講師として法政に出講されていた近藤晃先生のお誘いを受けて、1973年4月立教大学大学院博士課程に進学した。このときドイツ経済史担当の先生がおられなかったので（非常勤として神奈川大学から諸田實先生、ついで明治学院大学から柳澤治先生、学習院大学から北条功先生が担当され、のちに小笠原茂先生が着任された）、近藤先生は形式上指導教授を引き受けてくださり、ドイツ経済史にも造詣が深い小林昇、住谷一彦の両先生のところで勉強するようにと計らってくださったのである。私はこの点で近藤先生に大変感謝しているだけでなく、こうした環境を許してくれた経済学研究科にお礼申し上げたい。しかし当時小林先生はリスト研究から遠ざかり、直接にはスミスやステュアートに関心を移しておられたこと、また先生の大学院演習の開講日が私の高校非常勤講師としての出講日と重なっていたために、先生の指導を受ける機会を逸してしまった。私の勉強の中心は住谷一彦先生のゼミになり（本籍地は近藤ゼミ、現住所は住谷ゼミ）、先生の影響によってしだいに経済思想史の領域に関心を移していった。

博士課程が終了して1978年経済学部助手に採用されたのち、3年間の助手任用期間が終わるまでに学位論文を執筆することになった。私は1980年9月、小林昇先生を主査とする学位論文審査委員会（ほかに住谷一彦教授、小笠原茂助教授）の審査に合格し、立教大学大学院経済学研究科から経済学博士の学位を得ることができた。学位論文のタイトルは「19世紀末ドイツ第二帝制における経済政策論争——『工業国論争』の分析——」で、これは『立教経済学研究』第34巻3号、4号、第35巻1号に掲載され、のちに私の最初の著書『ドイツ経済政策思想史研究』（未来社1985年）に収録された。200ページ足らずのこの小著を未来社から刊行することができたのも小林先生のご支援の賜物であり、先生の学恩に深く感謝している。その後もシュモラー研究をはじめるにあたって強く励ましていただいた。先生は学会のレベルでは厳しかったが、個人的には親切でやさしかった。

- 3 『フリードリッヒ・リスト序説』(伊藤書店 1943/10)
- 4 フリードリッヒ・リストの植民論(『国際経済研究』5巻5号 1944/5) []
- 5 農業生産力上の国家市民——フリードリッヒ・リストの基礎的一研究——(福島経済専門学校設立25周年記念論文集『農業経済の諸問題』1947/10)
- 6 『フリードリッヒ・リストの生産力論』(東洋経済新報社 1948/9) []
- 7 割地農民の歴史的意義——リスト農地制度の一分析——(福島大学『商学論集』18巻2号 1949/9) []
- 8 『農地制度・零細経営および国外移住』[邦訳](日本評論社[世界古典文庫122] 1949/10)
- 9 同上解説 []
- 10 フリードリッヒ・リストと重商主義——リストの生産力論の学史的 position と類型とに関する一試論——(福島大学『商学論集』19巻2号 1950/7) []
- 11 フリードリッヒ・リストと産業革命(書き下ろし)
- 12 『フリードリッヒ・リスト研究』(日本評論社 1950/10 4・7・10・11を収録)
- 13 フリードリッヒ・リスト小伝——カール・ブリンクマンに拠る——(福島大学『商学論集』21巻2号 1952/8) []
- 14 「3月前」のドイツの段階——リストの『生産力論』を通して——(『社会経済史学』19巻6号) []
- 15 スミスとリスト——生産力の問題——(河出書房『経済学説全集』第2巻,高島善哉編『古典学派の成立』1954/12) []
- 16 リスト『政治経済学の国民的体系』(大河内一男編『社会科学の名著』毎日新聞社 1955/7)
- 17 『全集』以後のリスト研究(『立教経済学研究』10巻1号 1956/6) []
- 18 フリードリッヒ・リスト——その生涯と学説——(河出書房『経済学説全集』第5巻,大河内一男編『歴史学派の形成と展開』1956/6『経済学史研究序説』収録に際して副題を付加) []
- 19 東独のリスト(福島大学『商学論集』26巻2号 1957/9) []
- 20 『経済学史研究序説——スミスとリスト——』(未来社 1957/9 17・18・19を収録)
- 21 *Die List-Forschung in Ostdeutschland* (The Science Council of Japan : Division of Economics, Commerce and Business Administration. Economic Series No. 29. Tokyo 1962/2 「東独のリスト」ドイツ語版)
- 22 リスト研究における東独と日本——『自然的体系』の東独版によせて——(福島大学『商学論集』31巻4号 1963/3) []
- 23 歴史派経済学の父リスト(大河内一男編『経済学を築いた人々——ペティーからシュンペーターまで——』青林書院新社 1963/11) [理論的部分を「リストの政治経済学体系小論」

と改題]

- 24 リストの記念祭 (有斐閣『書齋の窓』127号 1964/11) []
- 25 「リスト文庫」のこと (『経済学史学会年報』2号 1964/11)
- 26 クフシュタイン紀行 (有斐閣『書齋の窓』134号 1964/11) []
- 27 リスト文献とリスト文庫 (『立教経済学研究』19巻2号 1965/9) []
- 28 カッフェ・フェルター (『週刊東洋経済』1965年10月30日号 1965/10) []
- 29 青年リストの伝記的諸問題——パウル・ゲーリンク教授の『若きリスト』から—— (『立教経済学研究』19巻3号 1965/12) []
- 30 リスト『農地制度』の前史と周辺 (『立教経済学研究』20巻2, 4号, 21巻1号 1966/7, 1967/1, 5) []
- 31 スチュアート・スミス・リスト (大河内一男先生還暦記念論文集第3巻『古典経済学の伝統』有斐閣 1966/8) []
- 32 リストの跡 (未来社 1966/9) []
- 33 フリードリッヒ・リストと経済学における歴史主義 (書き下ろし 1966/9) []
- 34 『フリードリッヒ・リスト論考』(未来社 1966/9 13・15・22・23・27・29を収録)
- 35 *James Steuart, Adam Smith and Friedrich List* (The Science Council of Japan : Division of Economics, Commerce and Business Administration. Economic Series No. 40. Tokyo)
- 36 青年リストとロイトリンゲン (『立教経済学研究』22巻2号, 23巻1号 1968/7, 1969/5) []
- 37 大塚先生とF・リスト (『大塚久雄著作集』岩波書店 第3巻月報 1969/3) [『帰還兵の散歩』未来社 1984/12に収録]
- 38 解題『スミスとリスト』(『大河内一男著作集』青林書院新社 第3巻『スミスとリスト』1969/10) []
- 39 スミスとリスト (お茶の水書房『社会科学の方法』13号 1970/1) []
- 40 フリードリッヒ・リストの『国民的体系』について (一橋大学経済研究所『経済研究』21巻1号 1970/2) []
- 41 『経済学の国民的体系』[邦訳] (岩波書店 1970/12)
- 42 『経済学の国民的体系』解題 (同上 1970/12) []
- 43 フリードリッヒ・リストの政治経済学体系 (日本学術振興会『学術月報』313号 1972/7)
- 44 オーバーシュワーベンの『土地整理』(大野英二・住谷一彦・諸田實編『ドイツ資本主義の史的構造』松田智雄教授還暦記念 有斐閣 1972/3) []
- 45 フリードリッヒ・リストの政治経済学体系 (日本学術振興会『学術月報』313号 1972/7)
- 46 『農地制度論』[邦訳] (岩波文庫 1974/8)

- 47 『農地制度論』 解題 (同上 1974/8) []
- 48 国民経済形成の問題によせて——スミス・リスト・ソルジェニツィン—— (双書『どう考えるか』 二玄社 第6冊 1975/7) [『帰還兵の散歩』に収録]
- 49 フリードリッヒ・リスト (『経済思想——人とその時代——』 NHK 大学講座経済学 1, 1977/4)
- 50 『小林昇経済学史著作集 F・リスト研究 (1)』 (未来社 1978/6)
- 51 『小林昇経済学史著作集 F・リスト研究 (2)』 (未来社 1978/12)
- 52 『小林昇経済学史著作集 F・リスト研究 (3)』 (未来社 1979/6)
- 53 『小林昇経済学史著作集 経済学史評論』 (未来社 1989/12)
- 54 スミス=リスト=マルクス現代を語る [座談会] (『経済セミナー』 300号 1980/1)
- 55 ヘンダースンのリスト伝に寄せて (大東文化大学『経済研究』 第6集 1984/3) [XI]
- 56 スイスのリスト (大東文化大学『経済論集』 42号 1986/9) [XI]
- 57 Friedrich List, *Die Welt bewegt sich, 1837*, hrsg. von Eugen Wendler, 1985. [文献紹介] (『経済学史学会年報』 24号 1986/11) [フリードリッヒ・リスト『世界は動く』と改題 XI]
- 58 Forschungen über Friedrich List in Japan (大東文化大学『経済論集』 46号「日本におけるフリードリッヒ・リスト研究」のドイツ語訳 1988/9)
- 59 半世紀のリスト受容 (中村勝己編『受容と変容——日本近代の経済と思想——』 みすず書房 1989/7)
- 60 リストのロイトリンゲン (『みすず』 341号 1989/7)
- 61 日本におけるフリードリッヒ・リスト研究 (書き下ろし 1989/9) [XI]
- 62 『小林昇経済学史著作集XI 経済学史新評論』 (未来社 1989/9)
- 63 リスト研究の新局面——ヴェンドラー教授の新著に寄せて—— (大東文化大学『経済論集』 49号 1989/12)
- 64 Friedrich Lists System der Sozialwissenschaft——von einem japanischen Forscher betrachtet (*Studien zur Entwicklung der ökonomischen Theorie*, 1990)
- 65 テューピンゲンでリストを語る (『みすず』 347, 348号 1990/2, 3)
- 66 Friedrich Lists System der Sozialwissenschaft (大東文化大学『日本経済研究報告』 [3] 1990/3)
- 67 リストの社会科学体系 (大東文化大学『経済論集』 50号 1990/4)
- 68 在りし日のリスト研究者たち (書き下ろし)
- 69 リスト生誕200年の東独 (書き下ろし)
- 70 『東西リスト論争』 (みすず書房 60, 61, 63, 64, 65, 67, 68, 69を収録 1990/4)
- 71 フリードリッヒ・リスト (Friedrich List) 生誕200年の諸学会 (『経済学史学会年報』 28

号 1990/11)

72 フリードリッヒ・リスト (『エコノミスト』1993年7月13号 1993/7)

73 「東西リスト論争」新考 (『日本学士院紀要』61巻2号 2007/1)

よく知られているように小林リスト論の最大の特徴は、山田盛太郎から大塚久雄に継承された比較土地制度分析の観点から行われた西欧資本主義発達史の成果を経済学史・経済思想史に持ち込んだ点にある(経済学史と経済史との試行錯誤的往反)。大塚によれば、イギリスで典型的に行われ産業資本の形成は、封建制の解体過程で生じた中産的生産者層が農村工業を拠点としつつ絶対王政の基盤となった前期的商業資本の支配を圧倒し(市民革命)、まだ幼い産業資本の保護政策としての重商主義をつうじて成長しつつ、その過程で中産的生産者層が資本家と労働者に両極分解する(その農民的側面が大小のエンクロージャー)という経路で遂行された²⁾。小林の理解ではリストの生涯と業績の中心は、ドイツにおける産業資本形成のための闘いである。

小林の戦前のリスト論のなかで論文「フリードリッヒ・リストの植民論」だけが『著作集』に収録されたことについて、小林自身は、『フリードリッヒ・リスト序説』(1943/10)の後に大塚久雄の「比較土地制度史の視野、独立農民の両極分解の視角」に促されて(「大塚久雄先生とF・リスト」『帰還兵の散歩』:142)、『農地制度論』自体の分析を進め、「リストの全思想=理論体系の骨組みが見通せるようになったという確信をもつに至」り、「さきの未熟な二論文[前掲目録1と2]が……この第3の論文によっていわゆる出征の前にある成熟度にまで達しえた」(「あとがき」:457-58)と述懐している。

2 代表作『フリードリッヒ・リストの生産力論』

こうした小林リスト論の本格的提示が、代表作ともいえる『フリードリッヒ・リストの生産力論』(1948/9)であるが、本書は『著作集』で185ページ(初版はB6版269ページ)の小さな著作である。本書は、兵隊生活のあいだにも「リスト研究のプラン」を練り(「大塚久雄先生とF・リスト」:142)、復員後に「ほとんどすべてのエネルギーを自分の研究に注いだ結果(『山までの街』:112)として成立したものであり、小林は、「リスト像をほとんど一変させるといふつよい予感」とそれに導かれた「作業の集中の濃度」によって「最大の愛着」を抱く小著だと回想している。それは、「コンパクトながらリストの総著作の内在的・包括的・体系的・客観的な再構成の試み」として、現在まで内外で「これに類似する労作を一つとして見ない」と自負している。さらに本書の特徴として「これまで顧みられなかったリストの

2) 大塚史学と近年の西洋史学の動向については、馬場・小野塚(2001)が詳しい。

世界経済論（帝国論）と農業論が立ち入って論じられ、しかも小林の「研究に固有のもの」として、「『農地制度論』を基軸・基底としてリストの全体系を理解する視座と方法」があげられる（「あとがき」：460-62）。すなわち本書は『リスト全集』に本格的に内在しつつその全体像を把握しようとした唯一の著書であり、その重心が『国民的体系』以後の帝国論と『農地制度論』の分析におかれている著作なのである。

本書を概観してみよう。

まずリストの全体像の把握とは、『国民的体系』とそれ以後の構想を「断層」として捉えたリスト全集の編者の立場を批判し、「全体系の理論的統一」を把握することにある（102-03）。

- 1) 『国民的体系』において提示された「価値の理論」にたいする「生産諸力の調和と均衡」という生産力の理論は、経済学の分析的理論ではなく、歴史的・個別理解の対象となる「与件の理論」の理論であり、リスト独自の思想ではないが、「正常国民」概念と結びつくことによってドイツ国民経済の資本主義化の政策思想として分析されるに値する独自の意義をもつ（108, 112, 117）。
- 2) この生産力の理論を正当化するために、「リストの中期の体系にのみ属する」（ゾンマー）段階説（未開 - 牧畜 - 農業 - 農・工 - 農・工・商）は、もっぱら工業力の育成を目的とする「歴史実用主義」（サリーン）の立場から構想されたために混乱がみられ、とくに第5の農・工・商段階は、「輸出工業国」と植民地を有する「帝国国民」へ展開することから、「生産諸力の調和と均衡」の理論が破綻しているだけでなく、「これと結合しつつ構成された生産力論自身の矛盾をも同時に露呈」させている（124, 130-31）。ただし小林は、経済発展段階説がその後ヴェーバーやゾンバルトによって「理念型」・「現実型」・「経済様式」として展開されたことは正しい、として板垣与一の指摘を肯定している（125）。
- 3) 『国民的体系』では、「正常国民」から「輸出工業国」・「帝国国民」へと発展しつつあるイギリスに対抗して、将来における「万国連合」を展望しながら、大ドイツ主義の立場からバルカン半島への進出を目指し、熱帯植民地へ共同参画しようとする意図によって「大陸同盟」が主張された（150, 166-67）。だが『国民的体系』以後になると、産業革命のもたらした矛盾（社会問題と恐慌）の認識から資本輸出と組織的植民によって自足的経済帝国建設へと向かうイギリス国内の動向に着目し、ドイツ工業・農業にとってのイギリス市場縮小の危機感と「正常国民」としてのドイツの経済的統一の必要性を痛感して「英独同盟」論へ転換する（147-49, 161-62）。ここでは仏露協商を牽制しつつドイツのトルコ進出とイギリスの地中海進出の提携という立場から、「ドイツ人の背後地としてのハンガリーに、更にここを根拠として『東南方』に」向かうという植民論の変更が行われ、欧州大陸縦貫鉄道構想をつうじてドイツを「準帝国」の地位へ引き上げようとする構想があらわれる（170-73）。したがって『国民的体系』と『体系』以後には「一つの断層」が存在する

(179)。

- 4) しかしこの断層は、『国民的体系』第3巻として書かれた『農地制度論』における農業近代化の改革案による「生産諸力の調和と均衡」の再構成によって「政策的統一性」が担保された(191, 179)。すなわち村落制度・交錯圃経営・零細耕作によって特徴づけられる西南ドイツの「委縮せる農業」を、エンクロージャーによる40 60モルゲンの「中規模の農場制度」の創設と「相当数の独立農民の確保」によって近代化し、この「中産的市民層」を近代国家の担い手である「国家市民」たらしめることによってフランスのジャコパン的独裁とイギリスのプロレタリアート発生を共に回避する「中道」を模索した(200 05, 210 11)。『国民的体系』における生産力論の矛盾は『農地制度論』によって解決され、「リストの全体系は『農地制度』によってようやく、国民的生産力としての本来の姿を現すに至った」のである(214)。
- 5) こうして農業近代化論はハンガリーから「東南方」へのドイツ人植民と結び付くことによって「リスト全体系を完結させる」ことになる(218)。『農地制度論』は、ヴュルテンベルク憲法闘争に参加した青年時代のリストの国家行政論を回復する視点と中世ドイツの土地制度に市民的自由の起源を見たメーザーの一貫した影響を示しており、この点で『国民的体系』はそこからスミスの世界への転向を意味するのであって、『農地制度』はそこからの「環帰」にほかならない(242, 266)。しかしこうした構想は、ハンセン『人口農本論』を通じてナチスのダレエ『血と土地』(1929)への道を示すものであり、ここに「『後進資本主義国』という宿命」を背負ったリストの限界が存在する(271 72)。

以上の概観から分かるように小林リスト論の特徴は、『国民的体系』を主著とするリスト理解から転換し、むしろ『農地制度論』を中心に据えることによって青年時代のリストと『国民的体系』以後の植民論の転換を統一的に把握し、これによってその全体像を構成したことにある。したがって大塚史学を媒介とした『農地制度論』のいわば「中産的生産者層」創出による「近代化の起点」という解釈が決定的な意味をもったことは理解できる。

3 戦中の著作『フリードリッヒリスト序説』の意義

しかしながらこの『フリードリッヒ・リストの生産力論』から最初の著作『フリードリッヒ・リスト序説』をふりかえてみると、かならずしも「未熟」では片付けられない問題があるように思われる。その点を明らかにするために、こんどは『序説』を概観してみよう[以下の引用にあたって旧漢字は新漢字に改めた]。

小林はまず序において、「今日の国民経済と広域経済」が「その自主性への要求と強いられたる封鎖性」によって「経済の基体への関心と配慮」を深め、リスト国民的生産力論の「独自

な教説」を改めて検討することによって、「国民生産力説とその『帝国論』」の「全き照明」が可能になる、と述べている。さらに「スミスの立場からリストを見る」立場がリストの「実体の消失」となることが批判されており、むしろリスト全集編纂つうじて生じたリスト復興論に掉さす立場が表明され、『国民的体系』が晩年の「世界政策的視野とその理論」から「いかに眺められるべきか」に注目が注がれている（45）。

- 1) 『国民的体系』における「生産諸力の調和」という思想は、「リストに対して積極的な関心を寄せるすべての人々の認識したところ」であり、「産業資本の代弁者」リストは「工業力」の育成を課題としていた（14-15）。「生産力の理論」を正当化するために提出された「段階説」は、「歴史主義の本質である歴史相対主義を自ら否定」（板垣）する「歴史実用主義」（ザリーン）の立場から提唱されたものであり、むしろ「スミスへの屈従」の立場から理論と政策を結合しようとした「著しく人工的な環」（36）であって、「その生産力論と本質的関連を有していない。（36, 40-41）」他方『国民的体系』で示される「正常国民」と「万国連合の理念」にもとづく大ドイツの建設と熱帯植民地開発への「共同参与」という構想（ナポレオンの大陸同盟構想によるイギリスとの対抗とバルカンからアジアへの進出）は、「英国の世界政策の前に全く無力」となった（26-27, 45-46）。
- 2) 『国民的体系』以後のリストは、ドイツに対する仏露の提携によって「大陸同盟」の不可能を認識し、「独英同盟構想」をつうじて、ドイツにとっての本国と植民地の「現実的結合」であるバルカンからアジアへの進出へと巡回する（48-54）。その志向はイギリスにおける「アウトアルキー＝封鎖的経済帝国志向」に対抗する『自給圏・広域圏』形成の志向であり、リストの主張は資本主義の矛盾を社会主義に求める主張と比べれば時代遅れになったという批判に対して、「国民的立場を貫いたリストの洞察こそ、その世界政策的なまた世界的な視野に於いて一層の真実を含んだもの」である（60, 65）。
- 3) しかしながらその後の世界史の展開は、「国民の生存の為に資本主義を超克して新しい国民的生産力を獲得しようとする」「新しい経済体制」の創造とそれに対応する「広域経済圏」を求めている。そうした観点からみれば、リスト国民的生産力論は、「白人の優越」というゲルマン民族優越論、イギリスと「同質の生産力と同様の生産機構をもつ諸封鎖経済圏の絶縁的並立」の志向、「産業資本主義の将来に対する期待と楽観」という限界のために、「帝国論の構想者ではあるとしても、広域経済論の祖ではなかった。」（72, 69-71, 73）
- 4) リストが放棄した「段階説の再生と再組織」は国民生産力論形成にとって今日的課題であり、その方法論的課題は「リストの志向の一面を継ぎつつもこれを捨て去らなかった歴史学派の成熟によって」「理念型論」・「経済様式論」などに展開されたのであるが、他方で段階説の一層の深化によって、「発展段階にそれぞれ適合したる生産方法の相異に基く本国と植民地間の分業の創造」、「広域経済圏における単純な地域的分業の観念」あるいは、

「土や血の自然的基体性」・「地理的資源的な基体性」の観念を立体的・構成的に規定する必要がある (76-80)。

以上の内容を見ればわかるように、『序説』の最大の特徴は戦時における「広域経済論」の観点からのリスト論だということである。周知のように小林は、1940年に「植民学」の担当者として福島高商に赴任するさい、矢内原忠雄に代わって東大で植民学を講じていた東畑精一に面会し、着任後その影響のもとで「広域経済圏の成立と植民学の成立——植民現象の本質に関する一般理論の素描——」と題する「評価には値しない」論説を発表している。『序説』はこれを受けたリスト論であり、小林自身は「内容と水準には満足できず、充足感らしきものも味わえなかった」と回想している（『山までの街』：7-8, 25, 58）。

しかしここで注目したいのは、「スミスとリスト」という『国民的体系』を中心としてリストを理解する方法を退ける立場、段階説は生産力論に独自のものではないとする理解、リスト解釈の焦点を『国民的体系』以降における「帝国論」、つまり「植民論」の旋回におく観点、これらは『生産力論』の重要な骨格を構成するものとして継承されていることである。内容のレベルの違いはあれ、これらの部分に『農地制度論』の分析による植民論の再構成と青年時代のメーザーの影響を受けた国家市民論を結合したものが『生産力論』だと言えるだろう。

こうした観点から見ると小林の先行研究では、『国民的体系』を分析対象とした高島善哉『経済社会学の根本問題』（日本評論社 1943年3月）、大河内一男『スミスとリスト』（日本評論社 1943年6月）の影響は小さく、むしろ『リスト全集』の立場を視野に入れ、初期の国家論から『国民的体系』を分析し、段階説の欠陥をその後のドイツ歴史学派の展開に探った板垣與一『政治経済学の方法』（勁草書房 初版1942、増補新版1963）の影響が強いといえるのではないだろうか。小林自身は初期リストの国制論は板垣に導かれたと述べているが（「あとがき」：460）、『序説』でも『生産力論』でも段階説の理解とその後の展開については板垣に負っており（『序説』：37、『生産力論』：126）、その影響はもう少し大きいように思われる。

なお広域経済論との関連で「土や血の自然的基体性」という表現が出てくるが、この部分は東畑精一の論文に依拠したものである。「土と血」という農本主義的表現は後の『生産力論』では、ダレーの著作をつうじてナチズムの先駆者としての位置づけのために使われているが、ここでは全く逆の肯定的表現として使用されていることが注目される。

4 『生産力論』以後のリスト研究

『生産力論』以後の文献を見ると、その部分を補完・拡大・敷衍する研究が行われた。まず『農地制度論』に関しては、『農地制度論』の2度の翻訳・解説、封建的土地所有の解体過程で生じた独立自営農民としての「割地的土地所有」（マルクス）を概念的・実体的に整理しつつ、

リストの農地改革構想がかつてのいわば歴史的に一回的な独立自営農を「蘇生」しようとしてかえって反動に導いた、とする「割地農民の歴史的意義——リスト農地制度の一分析——」、松田智雄・住谷一彦によって紹介された初期リストの農民論を翻訳・分析しつつ後期リストとの断絶を指摘し、他方で『農地制度論』で言及されたオーバーシュワーベンの「土地整理」の根拠となったワルラーシュタインの論説にさかのぼって検討し、さらにヘクシャーの研究に依拠したスウェーデンのエンクロージャーの紹介をつうじて、リストの「比較土地制度史的展望」の鋭さと問題性を確認した「リスト『農地制度』の前史と周辺」および「オーバーシュワーベンの『土地整理』である。

次にリストを産業資本の保護育成を要求した本来の「重商主義者」と位置づける点について、「フリードリヒ・リストと重商主義——リストの生産力論の学史的 position と類型とに関する一試論——」があり、これ以降小林はイギリス重商主義研究を並行して進めることになる。

さらに小林は、ドイツを中心とする海外の研究者およびその業績をたんねんに紹介した。『リスト全集』の成果を踏まえてその研究水準から一步抜けだしたとされる労作を伝記の形をとって紹介した「フリードリヒ・リスト小伝——カール・プリנקマンに拠る——」、『リスト全集』によってもたらされた「リスト・ルネッサンス」の動向を『農地制度論』の理解という観点から批判的に論評した「『全集』以後のリスト研究」、第2次大戦後リスト研究の復興を担った東独の研究をファビウンケを中心として論じた「東独のリスト」、ファビウンケによる『自然的体系』のドイツ語訳とそこに付された長大な「序論」を紹介した「リスト研究における東独と日本——『自然的体系』の東独版によせて——」、リストと同郷のゲーリンク（チュービンゲン大学教授）が退職ののちに新発見の資料を駆使して書き下ろした高水準の学問的伝記を紹介した「青年リストの伝記的諸問題——パウル・ゲーリンク教授の『若きリスト』から——」、ドイツ近代経済史の研究者として有名な著者による英文のリスト伝を紹介した「ヘンダースンのリスト伝に寄せて」、スイス亡命中のリストを論じたヴェンドラーの学位論文を紹介した「スイスのリスト」、ヨーロッパ共同体の先駆的思想家・闘争者という観点からの伝記的研究として上梓されたヴェンドラーの著書を批判的に論評した「リスト研究の新局面——ヴェンドラー教授の新著に寄せて——」がある。小林はこれらの論文をつうじてコンパクトな『生産力論』では十分に言及できなかった伝記的部分を補強し、毀誉褒貶に満ちた波乱万丈のリストの生涯を読者に伝える一方、海外の研究動向を詳細に紹介した。

他方で小林は、こうした紹介をつうじて海外の研究者と多面的な交流をもちつつ、自らの研究を海外に発信した。「東独のリスト」をドイツ語に訳した *Die List-Forschung in Ostdeutschland*、リストを含む小林の学問全体の特徴をスケッチした *James Steuart, Adam Smith and Friedrich List*、「半世紀のリスト受容」を書きなおした「日本におけるフリードリヒ・リスト研究」のドイツ語訳であり、その短縮版が1989年5月9日にロイトリンゲンで開催されたリスト生誕200年記念シンポジウムで報告された *Forschungen über Friedrich List in*

Japan, 同じくチュービンゲンで200周年記念のために行われた「リスト研究会」で発表されたペーパー Friedrich Lists System der Sozialwissenschaft (邦訳「リストの社会科学体系」)である。ドイツの研究者との交流は「在りし日のリスト研究者たち」で語られており、またリスト生誕200年記念シンポジウムの模様は「リストのロイトリンゲン」、「チュービンゲンでリストを語る」に詳しいが、特筆すべきは、『農地制度論』を軸としてリストを解釈し、晩年の植民論をナチズムの先駆と位置づける小林リスト論の本質的部分が、ナチ時代をかいくぐったドイツの研究者と鋭い緊張関係をもたらしたことが繰り返し述べられていることである。そこで小林が、「nationalistisch Ökonomie 国民主義的経済学」という表現を「nationale Ökonomie 国民的経済学」に訂正すれば、小林の論文をドイツの雑誌に掲載するとK・E・ポルンの提案を拒絶したことは、小林自身がそこに「速断と誤解」があったと反省しているとはいえ、研究者としての姿勢と矜持を考える上で決して忘れられるべきではない（「リストの記念祭」：325, 330, 「在りし日のリスト研究者たち」・「チュービンゲンでリストを語る」『東西リスト論争』：44-46, 147)。こうしたエピソードは、リスト研究をめぐって第2次大戦が同じ敗戦国の研究者に残した深い傷をうかがわせるものであろう。

こうした交流をつうじて小林はリストを含む歴史学派の権威としてドイツで評価されるにいたった。前述したヘンダースンのリスト伝の紹介は、ドイツの「リスト協会」がリスト生誕200年記念行事の一環としてヘンダースンのリスト伝をドイツ語に翻訳する企画あたって鑑定を求められたことをきっかけに書かれたものである（XI：105）。また、これは私の個人的記憶であるが、ロツシャーの『ドイツ国民経済学史』*Geschichte der National = Oekonomie in Deutschland*, 1874. が1992年に復刻される際、おそらく編者の一人シェフォールトをつうじて、その別冊のかたちで出された「解説書 Vademecum」の執筆を依頼されたが、断ったという話を聞いたことがある（実際の解説はバックハウス、アイザーマン、グレーネヴェーゲン、シンツィンガーが執筆）。1988年のシュモラー生誕150周年記念シンポジウムを機に歴史学派およびドイツ国民経済学の伝統が省みられるようになり、リスト研究者以外にも小林の研究が認知されるようになったのではないかと推測される。

次に小林はこうしたリスト研究の深化と拡大を推進しながら、研究の成果を学会内外の読者に向けていわば啓蒙的に発信した。エッセイは別として、高島善哉編『古典学派の成立』（河出書房『経済学説全集』第2巻）に掲載された「スミスとリスト——生産力の問題——」、大河内一男編『社会科学の名著』（毎日新聞社）に向けた概説「リスト『政治経済学の国民的体系』」、大河内一男編『歴史学派の形成と展開』（河出書房『経済学説全集』第5巻）に収録され、レンツやブリックマンの研究成果を摂取しつつ小林がはじめて伝記的記述に取り組んだ「フリードリヒ・リスト——その生涯と学説——」、大河内一男編『経済学を築いた人々——ペティーからシュンペーターまで——』（青林書院新社）に収められた「歴史派経済学の父リスト」、略伝を含んだ『経済学の国民的体系』解題、NHK 大学講座テキスト『経済思想——

人とその時代——」のために書かれた「フリードリッヒ・リスト」、『エコノミスト』「世界の経済学者」シリーズに寄稿した「フリードリッヒ・リスト」などである。さらに、大学生向けの教科書として編まれた『経済学史』(有斐閣双書 1967)、『講座 経済学史』(同文館 1977。その「歴史学派」は「リストと歴史学派」と改題して に収録)、『新版経済学史』(有斐閣双書 1986) などにおいて「歴史学派」・「ドイツ経済学」の項目を執筆した小林は、その叙述の中心をリストにおいた。これらの啓蒙的著作や学生向けテキストの執筆をつうじて小林リスト論は人口に膾炙したといえよう。

つまり『生産力』論以降の小林は、『農地制度論』の周辺にかんする経済史的・思想史的研究を深める一方、海外の研究者との交流を積極的に推進してその紹介と自らの研究の発信に努め、リストの主著(『国民的体系』と『農地制度論』)の翻訳、啓蒙的著述・テキストの執筆をつうじて自己の研究成果の普及に精力を注いだ。坂井は、小林が「メーザーの『オスナブリュック史』を本当に通読したごくごく少数の日本人の一人」であると指摘し、小林のリスト研究が「精密なメーザー研究」を含んでいることを称賛しつつ、そうしたメーザー研究が継承されなかった点を嘆いている(坂井 2004: 238-39)。

しかもこれらはイギリス重商主義・スミス研究と並行して行われたのである³⁾。

5 小林リスト論批判と晩年における小林の立場の変化

以上のような精力的な研究・著述活動をつうじて小林リスト論は、日本の経済学史・経済思想史研究におけるスタンダードの地位を築いたといつてよいだろう。しかし『生産力論』で示された小林のリスト理解にたいする違和感や批判がなかったわけではない。小林批判の主要な系譜は『農地制度論』とそれ以後に重点をおく小林に対する批判・不満を底流にしているように思われる。『若きリスト』を書いたゲーリンクの「示唆」によって遂行された松田の研究では、リストの政策思想の中心にあるのは、大農と国民的工業による農工の近代的経済循環を形成しようとする「国内市場形成の理論」・「国内市場形成の政策論」であり、それは初期のリストから一貫して存在していたと主張され(松田 1967a: 185, 156-163)、『農地制度論』に関しても「リストの見解からすれば、工業化と余剰人口の工場への吸収こそは、零細経営問題解決の方法であった」(松田 1967b: 19)。リストの土地整理の提案を資本主義発展の「アメリカ型」に「適合的関連」を有する「小農エンクロージャー」理解し、しかもそれは当時の西南ドイツの農業事情からみて「きわめて現実的な提案」であるとともに、その着想はアメリカ農業事情の観察に由来する、との住谷の小林批判も『国民的体系』以前のリストに重点をおくもの

3) 『著作集』が刊行されているころだと思うが、小林先生がわれわれ大学院生に向かって真面目な顔で、「自分は書きすぎたから君たちは2-3冊にしなさい」と述べたことを記憶している。

である(1969:10, 70)⁴⁾。またスミスの「価値の理論」にたいする「生産力の理論」の起源をめぐって、『自然的体系』を重視するゾンマーを批判し、アメリカの国民経済学者レイモンドの「国民的富」論に求めた高橋の主張(高橋2008:102-128)、あるいは逆に「生産力の理論」はスミス理論のドイツ化であるとの立場から「スミスとリスト」の視角を押し広げ、初期リストから読みなおそうとする片桐の試み(片桐:171-211)も初期リストを重視する点では共通している⁵⁾。

これらの批判に対して小林は、住谷への反論で示されているように、「特定のきわめて限られた文献の範囲のなかだけでリストを論ずる」態度を厳しく批判し、リストの「全面的研究」を絶えず要求した(『リストとヴェーバー』のリスト——住谷一彦著『リストとヴェーバー』におけるリスト像について——:361-62)。この点で小林は基本文献の徹底的な繙読と研究史の入念な整理にもとづく『生産力論』で提示した全体像の提示に自信をもっていたといえよう。小林は、「私の彫り上げたこの全体像に対する正面からの批判は、今日になってもまだ現れていない」と述べている(『私の学問形成:戦中』『経済学史春秋』:186)。小林批判の系譜にも省みられるべき論点の提示はあるとしても、小林・住谷論争の分析において、「綿密なリストの読解に基づく小林の住谷批判」の「説得力」と、戦前の満蒙開拓と戦後の農地改革を視野に入れた「小林のリスト論のすごみ」を評価した原田(2006:11-12)の判断は、大方の共感を得られるのではないだろうか。

他方で『農地制度論』を中心としてリストを理解する小林の立場は、『著作集』刊行時にも「不変」とであると強調しており(「あとがき」:462)、最後の『東西リスト論争』新考でもその立場が「重大な反論を受けずにきている」と自負していた(81-82)。しかしながら1970年代半ばごろから高度経済成長による環境破壊と食糧自給率の低下に危機感を強めた小林は、正統的経済学のGNP主義に対抗する異端的経済学の代表として『国民的体系』を位置づけ、その「農・工・商の調和と均衡」=「正常国民」の理念を強調するようになった(「あとがき」:462-63)。前記「ヘンダースンのリスト伝に寄せて」の末尾で小林は、自分のリスト研究のなかでの実践的関心の重点が「balanced growthの問題」に移っていったが、そうした問題意識は『国民的体系』のリストを『農地制度論』のリストによって深めるという作業によってであった[XI:129-30]と述懐している。

しかしこのような新たな観点からリストを読み直す体力は、精神的にも肉体的にも小林に残

4) 手塚は、リストを国民経済形成論の立場からみると「アメリカ型」と適合的関連にある、として住谷に賛成する。手塚真「ドイツ国民経済の型について——リストをめぐる小林・住谷論争を中心に——」(住谷・田村・小林 1985:38-39)

5) こうした観点からみると、日本においてはじめてリストの本格的伝記を刊行した諸田(2003)・(2007)の画期的な仕事は、ある意味では初期リストを重視する小林リスト論批判の系譜と小林リスト論を総合する試みといえる。

されていなかった。これは次の世代に遺した小林のメッセージであると解釈すべきであろう。

6 小林とドイツ歴史学派

小林が執筆した前述の教科書を見ると、いずれも「ドイツ歴史学派の祖」ないし「歴史派経済学の父」と位置づけられたリストは詳細に記述されているが、ドイツ歴史学派そのものはかんたんに概説されているにすぎない。実は「ドイツ歴史学派の祖」という表現は屈折したものである。第1に小林は、ヴェーバーが「ロツシャーとクニース」でリストを無視したのは、この「実践家に対する学会の評価の程度を物語るもの」と述べており（「フリードリッヒ・リスト——その生涯と学説——」：11-12）、後のドイツの歴史学派を中心とするドイツのアカデミズムが、シュンペーターも含めてリストを正しく評価してこなかったことにたいする批判の意識がある。第2に、リスト以降のドイツ歴史学派は、ロツシャーとシュモラーの重商主義論に示されるように、リストが戦った「前期的資本と絶対主義」を擁護するものであり、しかも彼らは、「歴史主義」とは無縁の「歴史実用主義」の観点から提示されたリストの段階論を書き改めることに精力を注いだ、とする判断が存在していた（「リストと経済学における歴史主義」：126-27）。つまり「ドイツ歴史学派の祖」という表現は、リスト以後の歴史学派がリストを培ったメーザー以降の歴史主義と健全な国民主義から逸脱してしまい、むしろ負の遺産を継承したのであって、したがってリストに還ってその意義を検討しなければならない、とする立場が表明されているように思われる。小林は「歴史派経済学の父」という表現にかかわって、ゾンマーから「歴史学派の創始者はロツシャーであるというのがドイツの学界の常識であることを」知ったと述べているが（：118）、小林の念頭には「歴史学派の創始者」はリストであるとの思い込みがあった⁶⁾。小林は、リストの資本家的実践家としての性格を強調したマルクス＝レーニン主義の立場に立つファビウンケの評価に同調し、「歴史学派の否定こそ、その祖とされるリストを理解するための唯一の道」と強調し（「東独のリスト」：177、傍点是小林）、また『資本論』の最後の注で『農地制度論』を引用したマルクスにふれて、「リストはマルクスの源流の一つ」（「ステュアート・スミス・リスト」：475）と指摘しているが、歴史学派ではなくマルクスの方向にリスト歴史主義の流れをみていた。そこには歴史学派の倫理主義と精神主義が「アダム・スミスの学問以前」だとする判断があり、したがってそれは「葬儀執行者」ヴェーバーの登場によって終焉をよぎなくされる、「リスト、マルクス、メンガー、ヴェーバーなどの巨像を外側においた「矮小」な存在にほかならないとする理解があった。そこでは「マルクスやヴェーバーやシュンペーターをくぐった者の目で」を再検討する必要性

6) 大河内もリストを歴史派経済学の「創設者」と呼んでいる（大河内 1943：316）。加田はリストを歴史学派の「最初の萌芽」・「先駆者」と規定しており（加田 1931：302, 303）、後述するように、加田と大河内・大塚との間に歴史学派理解の断層がある。

は指摘されていたが（『リストと歴史主義』：12, 38-40）、歴史学派に対するこうした否定的位置づけは、晩年の経済学史学会における講演「経済学・歴史・歴史主義」（住谷・八木（1997）、『経済学史春秋』所収）にいたるまで基本的には変わらなかったように思われる。

ちなみにここで詳しく論ずることはできないが、「歴史学派」という呼称は方法論争におけるメンガーのシュモラー批判のなかで使用され、ヴェーバーが「ロッシャーとクニース」を執筆したころによやく一般的になったものである。リストがその「先駆者」として位置づけられるようになったのは『リスト全集』の企画が展開した第1次大戦前後である⁷⁾。

小林の歴史学派に対する嫌悪感は、なによりも大河内や大塚の歴史学派理解に由来するものだろう。大河内は経済の内的推進力としての「新しき経済倫理」を求める立場からスミスの「経済倫理」とリストの「生産力論」を評価する一方、「経済の外」から「社会問題」を「修正」しようとした「歴史派経済学の立場」を対比し、こうした立場は「経済人」という経済合理性を無視するいわばたんなる道德主義だとする批判する（大河内 1943：32-33）。周知のように大塚は後に自らの研究を回顧して、産業資本の歴史的系譜を前期的商業資本に求める立場を「古典理論」と呼び、その「もっとも重要なルーツをドイツの新歴史学派にもっている」と明言している（大塚 1980：161）。当初の大塚の念頭にあったのはブレンターノとアドルフ・ヘルトであるが（大塚 1941：125）、「絶対主義国家の経済政策体系とそれを支える経済思想がむしろ主要な研究対象となるにいたった」シュモラーの重商主義論も間接的にこうした系譜に位置づけられたように思われる（大塚 1952：129⁸⁾）。

7 ドイツ歴史学派と「日本経済学」

さらにこのような立場のいわば背景として、ドイツ歴史学派の戦前・戦中における受容の問題がある。小林が東京帝国大学経済学部を卒業した1939年（昭和14年）にいわゆる「平賀肅学」がおこり、「人民戦線事件」でマルクス経済学者の大内兵衛らを追放した後の河合栄次郎らの「自由主義派」と土方直美らの「革新派」の対立を、両者の辞職勧告という喧嘩両成敗という形で決着させた。小林の属したゼミナールの恩師本位田祥男は「革新派」に属し、土方らとともに辞職している。小林は本位田や他の教授たちの学殖が「尊敬に値するものではなかった」と述べているものの（『山までの街』：3）、これら革新派の学問についてなにも語っていない。

7) 歴史学派の呼称と歴史学派の概念規定については、田村・原田（2009：第4章「歴史学派」）を参照。なおリストを「歴史学派の先駆者」と最初に呼んだのはシュモラーではないかと思われる。彼は『リスト全集』の企画を提唱し、その資金援助のために行った1909年の講演でそう述べている。この『リスト全集』の企画は第1次大戦後のインフレによって挫折した（田村 1993：221）。

8) 大塚によるシュモラー重商主義論のこうした解釈の問題点については、田村（1993）：258-60を参照。

「革新派」とは総動員体制の志向から個人主義的・自由主義的経済学に対抗する「政治経済学」・「日本経済学」を標榜した学者グループを指しているが、ナチスのイデオログ的存在であるゴットル＝オットリリーエンフェルトの影響を強く受けていた（牧野 2010 : 129-31）。

板垣は前述の著作で1930年代後半のドイツにおいて、英米経済学に対する「アンチ・リベラリズム」の観点から「歴史学派の復興」の機運が高まったことを指摘している。その対象となったのは、メーザー、フィヒテ、アダム・ミュラー、リストおよび新旧歴史学派の人々である。その意味で「リスト・ルネサンス」はいわばドイツ歴史学派ないしドイツ国民経済学・ルネサンスの一翼であった。板垣によれば、経済学史のこうした解釈を提示したのはザリーンである。ザリーンは経済学史をリカードウ的な「合理的理論」と歴史と全体性を志向する「直観的理論」に弁別し、実証主義的な「細目的研究」に陥ったシュモラー以後の歴史学派から「直観的理論」を回復させようと試みた（板垣 1942・1963 : 126-140, ザリーン/高島訳1944 : 訳者解説を参照。なお原田（2001）も参照）。上記のように世紀転換期に成立した「歴史学派」という呼称をドイツ・ロマン主義とリストの伝統に結び付けたのはザリーンである。

ゾンバルトの『高度資本主義』に触発されてザリーンが「直観的理論」を提称したのは1927年であるが（原田 2001 : 147）、こうした意味での「歴史学派の復興」はすぐさま日本にも伝わっていた。ヴェーバー『経済史』を『社会経済史原論』（岩波書店 1927）として翻訳した黒正巖は、「大正十五年日本経済史学界の回顧」（『経済往来』1926年12月号）において、1920年代の日本経済史研究の隆盛を指摘し、そこから「日本独特の経済学・社会学の建て直し」を提唱したが、「今や日本の経済学界は往年独逸に於ける歴史派勃興の時代と同じ様な感がすることから、「歴史学派的方法」を採用し、「唯物史観」と対抗する「日本歴史派の確立に精進するの覚悟」を促していた（106-107）。この『経済往来』1926年12月号には、土方成美、河津暹、本位田祥男らも寄稿し、こぞって「我国独創の経済学を建設」すべきと唱和している。つまり「革新派」の「日本経済学」はドイツの「歴史学派復興」に呼応する形で提起されていたのである⁹⁾。

柳澤によれば、東大退職後に第2次「近衛内閣」のブレーンとして活動した本位田の統制経済論は、資本主義の危機認識にもとづくアウトタルキー的統制経済を主張したゾンバルトらの「資本主義終焉」論を下敷きとするものであった。他方で土方は日本人の国民性・風土・皇室との一体性を強調する「日本経済学」を提唱し、また土方の影響を受け「日本経済学」のいわば集大成者として登場した難波田春夫は、統制経済論が含んでいたある種の経済的合理性と資本主義批判に対する不満から、天皇を中心とする日本民族の「血と精神」の一体性を強調する家族主義的な天皇制イデオロギーを展開した。ドイツの動きに触発された「日本経済学」は経済合理性を喪失した天皇制イデオロギーに転落してしまったのである。大河内の「新しい経済

9) この点は岡部洋實北大教授の御教示によるものである。

倫理」の探求から遂行された社会政策研究・経済思想史研究や大塚のナチス・ドイツの植民政策の触発によって展開された農村工業研究は、このような精神主義的な「日本経済学」および非合理的な総動員体制の在り方に対する批判として提出されたものである（柳澤 2008 : 21, 317-324, 280-82, 270-278)¹⁰⁾。

本位田ゼミで大河内・大塚の後輩だった小林は、戦時のこうした学問の布置状況で育った。難波田春夫『国家と経済』に対する書評論文（『商学論集』第14巻1号）で小林はその非合理的な側面を厳しく批判している。すなわち難波田が低賃金の原因を日本の精神風土が育んだ「愛郷心」に求めたことについて、「わたくしは疑問をもたざるを得なかった。蓋し、労働者は愛郷心を持たなくとも、資本（或いは近代的産業）の命令によって帰郷せねばならないだろうからである。紡績業に於いて短期間に若い女工が交替するのはしばらくの間家の生計の補助を為し、そののち自らの愛する故郷に帰ろうという女工の意志によってではなく、資本が短期間に女工を交替せしめることによって若い肉体のエネルギーとその低賃金とを同時に確保しようと欲したからではなかったろうか。」「農民は土地を失ったからと云って直ちに農村を去りはしない。併しそれは特殊な愛郷心によることもあるが、むしろ一層一般的な原因は、農民に対して都市の吸引力と農村の遠心力が働かないからである。そうしてこの後者に関して日本ではエンクロージュアの行われなかったことは、人の知るところであろう。（97-98）」この記述は明らかに講座派的・大塚史学的観点から書かれている。小林は、リスト『生産力論』の奥には戦後の農地改革と軍国主義日本の農業政策の記憶とが「かさなっていたまきこまれている」（『リストとヴェーバー』のリスト——住谷一彦著『リストとヴェーバー』におけるリスト像について—— : 354）と強調しているが、大塚史学の受容は「日本経済学」からの脱出でもあった。小林のドイツ歴史学派に対する懐疑的態度はここにも由来していると思われる。

小林が上記の経済学史学会の記念講演で歴史学派再評価の動きについて、「日本のアカデミックな経済学界は歴史学派の影響を受けることが大きかったから、……歴史学派への再評価のころみかそういう影響のたんなる継続ないし再生とならない」（『経済学史春秋』 : 127）よう警告したが、その意味はこうした歴史的経緯によって理解される。

10) 戦前・戦時の大塚によるヴェーバー理解を検討した中野は、1930年代は本位田がヴェーバーの「資本主義精神論」の立場に、大塚はヴェーバーを批判するブレンターノやゾンバルトの立場に近かったが、1940年代になると大塚がヴェーバーの立場に転換するとともに、本位田をブレンターノやゾンバルトの立場に追いやったと主張している（中野 2001 : 25-32）。これはドイツ歴史学派に発する「古典理論」が大塚以前には通説だった、とする大塚自身の解釈に疑問を投げかけるものである。前述の加田の引用でも指摘したが、大河内・大塚的な歴史学派解釈とそれ以前では何らかの断絶があるのではないだろうか。

おわりに

小林のリスト研究は基礎資料・関係文献の入念な調査とその全体像の独自の解明によって一世を風靡したといつてよいだろう。それはこれまで見たように、代表作『生産力論』によるものだけではなく、その後の研究のたゆまぬ深化と周辺への広がりをつうじて達成されたものである。このような努力を続けた小林の研究者の姿勢からわれわれが学ぶところは極めて大きいといわなければならない。

しかし他方で、ドイツ経済思想史研究の立場から見れば、小林がリスト研究からイギリス重商主義研究、つまりリスト、ステュアート、スミスに囲まれた「デルタ」の開拓に転じたことによって、リスト以後のドイツ歴史学派研究の空白が続いたことも事実である。そこにはたんなる研究対象の問題というよりも、戦前・戦時におけるドイツ歴史学派の影響とそれに対する大河内・大塚の批判的態度があった。小林のリスト研究はドイツ歴史学派からの遠心力の結果であったように思われる。その点で原田が、小林の研究の圧倒的な位置による関心の集中化を指摘し、「今やそこから漏れた他の諸思想への目配せ」を主張したことは正しい(原田 2006 : 16)。

小林の研究でわれわれが継承すべきは、「経済学史と経済史との試行錯誤的往反」という方法的態度である。それは価値・価格理論に集約される狭義の経済理論史に還元されない広義の経済思想史ないし政策思想史に接近する場合の実に豊かな観点であることを、小林は自らの膨大な研究をつうじて証明した。前述の柳澤は、大河内や小林の狭い歴史学派理解を批判し、戦前の「歴史学派復興」に沿って再評価されたゾンバルトやゴットルらの親ナチスの経済学者だけではなく、第1次大戦後に活動したハルムス、ベッケラート、オイレンブルクらの「歴史学派の第3世代」の非ナチスの立場に立つ独自の世界経済認識を再評価している(柳澤 1998 : 223以下)¹¹⁾。これは「経済学史と経済史との試行錯誤的往反」のひとつの在り方であり、私の『ドイツ経済政策思想史研究』や『グスタフ・シュモラー研究』もそうした方法を念頭においたものである。それは埋もれた過去の経済学者を発掘する視点として、また偉大な経済学者の理論的業績と伝記を異なった観点から照射する視点として依然として有効である。

1990年代以降のドイツ歴史学派再評価のなかで環境史の観点からゾンバルト再評価が行われている。ゾンバルトのアウトタルキーは、必ずしもナチスの膨張的イデオロギーに連なるものではなく、むしろ近代技術による環境汚染に対する批判と伝統的な農業と手工業の再建を含む均衡のとれた経済圏の創出という観点を有していた¹²⁾。また小林がこだわった『血と土地』の著

11) なお柳澤は、それ以前から資本主義経済の構造転化論争・社会的移動をめぐる論争の分析をつうじて歴史派経済学者の認識に注目している(柳澤 1989 : 169 233)。

12) ゾンバルトのこの側面については、近く刊行予定の拙論「資本主義とエコロジー——ゾンバルトの

者でナチスの農業大臣だったダレーは、同時に有機農法の熱心な提唱者・エコロジストであったことが注目されている（藤原 2005：79以下を参照）。小林がそこから脱出しようとした1920-30年代のドイツの経済思想は今日ようやく客観的評価が可能になった時代を迎えた。その意味でリスト『国民的体系』をあらためて「balanced growth」の観点から読み返すだけでは十分なのではないだろうか。

[小林以外の引用文献]

- 大河内一男 (1943)：『スミスとリスト』日本評論社
- 板垣與一 (1942；1963)：『政治経済学の方法』勁草書房
- 大塚久雄 (1941)：「近代資本主義発達史における商業の地位」『著作集』第3巻 1969
- 同 (1952)「重商主義成立の社会的基盤」1952, 『著作集』第6巻 1969
- 同 (1980)：「いわゆる問屋制度をどう捉えるか」『大塚久雄著作集』第11巻 岩波書店 1986
- 片桐稔晴 (2007)：『古典をひもとく社会思想史』中央大学出版会
- 加田哲二 (1931)：『独逸経済思想史』改造社 『経済往来』1926年12月号
- 坂井栄八朗 (2004)：『ユストゥス・メーザーの世界』刀水書房
- ザリーン/高島善哉訳 (1944)：『ザリーン経済学史の基礎理論』三省堂
- 住谷一彦 (1969)：『リストとヴェーバー』未来社
- 住谷一彦・田村信一・小林純編 (1985)：『ドイツ国民経済の史的研究』お茶の水書房
- 住谷一彦・八木紀一郎編 (1997)：『歴史学派の世界』日本経済評論社
- 馬場哲・小野塚知二 (2001)：『西洋経済史学』東京大学出版会
- 高島善哉 (1941)：『経済社会学の根本問題』日本評論社
- 高橋和男 (2008)：『アメリカ国民経済学の系譜』立教大学出版会
- 田村信一 (1985)：『ドイツ経済政策思想史研究』未来社
- 田村信一 (1993)：『グスタフ・シュモラー研究』お茶の水書房
- 田村信一・原田哲史編著 (2009)：『ドイツ経済思想史』八千代出版
- 中野敏男 (2001)：『大塚久雄と丸山眞男——動員、主体、戦争責任——』青土社
- 原田哲史 (2001)：「歴史学派の遺産とその継承——ザリーンとシュピートホフの『直観的理論』」
『思想』2001年2号
- 同 (2006)：「F・リスト——温帯の大国民のための保護貿易論——」八木紀一郎編『経済思想
経済思想のドイツの伝統』日本経済評論社
- 藤原辰史 (2005)：『ナチス・ドイツの有機農法』柏書房

牧野邦昭 (2010) : 『戦時下の経済学者』 中公叢書

松田智雄 (1967a) : 『ドイツ資本主義の基礎研究』 岩波書店

同 (1967b) : 「零細経営と国外移住」 大塚久雄・武田隆夫編 『帝国主義下の国際経済』 東京大学出版会

諸田實 (2003) : 『フリードリヒ・リストと彼の時代』 有斐閣

同 (2007) : 『晩年のフリードリヒ・リスト』 有斐閣

柳澤治 (1989) : 『ドイツ中小ブルジョアジーの史的分析』 岩波書店

柳澤治 (1998) : 「第1次大戦後における歴史派経済学と政策論」 住谷・八木編 『歴史学派の世界』

柳澤治 (2008) : 『戦前・戦時日本の経済思想とナチズム』 岩波書店